

Ⅱサムエル6章「主への礼拝の場」

天地を造られ、そのすべてを治めておられる、聖なる神、主の御前に私たちは出て、礼拝を献げています。目には見えませんがこのところに主がご臨在なされ、私たちとお会いくださっているのです。その主の前に恐れと喜びをもって礼拝を献げているのでしょうか。

1. 神の箱を移す（：1～11）

ダビデはエルサレムを新しい都とし、国の政治的な中心となりましたが、イスラエルの信仰における中心にもしようとし、します。そのために、神の箱をユダのバアラからエルサレムに運び上げようとし、します。

神の箱はペリシテ人との戦場に持ち出され、奪われてしまいました。ところが、神の箱が運ばれたペリシテ人の町に災いが起こり、ペリシテ人は神の箱をイスラエルに返しました。神の箱はキルヤテ・エアリムに運ばれ、アビナダブの家に置かれ、彼の息子が神の箱を守るために聖別されました。その後、サウルが王になったのですが、サウル王の時代には神の箱は顧みられずにそのままにされたようです。

ダビデはその神の箱をエルサレムに運び、主の臨在を中心として、イスラエルを主への信仰によって一つにしようとし、しました。そのことは主のみこころにかなうことです。

ダビデは全イスラエルに呼びかけ、精鋭三万を集めて、その兵たちを引き連れてユダのバアラに行きました。そして、アビナダブの家から移そうとして、新しい荷車を用意し、それに神の箱を載せて、その荷車を牛に引かせて、運びました。アビナダブの息子のウザとアフヨがその荷車を御していました。ダビデと人々は様々な楽器を鳴らし、「主の前で」喜び踊ったとあります。

けれども、新しい荷車に載せて牛に引かせて運ぶというのは、ペリシテ人が採った方法です。そして、三万の精鋭が荷車の周り、前と後ろを囲んで行列を組んで進んで行ったであろう光景を想像すると、指導者の威厳を示し、国威高揚を図っているように感じます。

そのダビデとイスラエルの全家の喜びはすぐに消えてしまいます。神の箱を載せた荷車を引いていた牛がよろめいて、神の箱が倒れそうになったのでしょう。そばにいたウザが手を伸ばして神の箱を抑えました。すると、主の怒りがウザに向かって燃え上がり、ウザはその場で打たれて死んでしまいました。

8節。どうしてこのようなことになったのでしょうか。喜びが一転して悲しみと恐れになりました。この出来事は人々の心に刻まれ、その場所は「主がウザに対して怒りを発せられた」という意味の「ペレツ・ウザ」と呼ばれるようになりました。

ダビデはどうしてこのようなことになったのか十分に理解できないままに、神の箱をエルサレムに運ぶことをやめました。さらに災いが起こることを恐れ、主の箱をオベデ・エドムの家に回しました。しかし、主の箱がとどまったオベデ・エドムの家族を主は祝福されました。

主の箱がオベデ・エドムの家にとどまるのは三か月になりますが、その間にダビデは自分の信仰と想いを吟味させられたことでしょう。本当に信仰のゆえに主の箱を運ぼうとしたのか、主の臨在に対する恐れがあったのだろうか、不純な動機がなかったのだろうか、とダビデは主に問われたに違いありません。

そして、主に問われたダビデは律法の定めに戻ることになりました。それで主の箱を運ぶ場合の定められた方法を確認することになりました。実は、荒野でイスラエルの宿営が移動し、神の箱や幕屋とその器具などを運ぶ時、その運び方も主によって定められていました。その時には、まず祭司が幕屋に入り、仕切りの垂れ幕を取りおろして、それで神の箱を覆い、その後にレビ人のケハテ族が入って、かつぎ棒で担いで運ぶことになっていたのです。ダビデはその定めを知ったのです。

私たちも何がいけなかったのか、と主の前にへりくだり、みことばに戻るとき、みことばによって正されます。主を恐れ、主に聞くなら、主はご自身の栄光のために、私たちを教えて、ふさわしく導いてくださいます。

また、この出来事によって、主の聖さが表されました。ウザは倒れそうになった神の箱を支えたのであって、その場にいたら誰でもそうするだろうし、悪意はありませんでした。しかし、神の箱の運び方まで注意深く定められていたのは、神の聖さに人は簡単に触れてはならない、その厳粛な聖さが侵されてはならないからでした。その主に対する恐れを忘れてはならないのです。

2. 主の前でのふさわしいあり方（：12～19）

神の箱のことでオベデ・エドムの家が祝福されたことを聞いたダビデは、主が生きておられ、主の臨在には恵みがあることを深く知りました。そして、改めて主の箱をエルサレムに運ぶことにします。

13 節。「主の箱を担ぐ者たち」とあるように、今度は律法の定めに従った方法で運びました。三万の精鋭はいなかったようで、最初の時のような派手さはなかったように思います。しかし、ダビデには聖なる主の前におけるふさわしいあり方を学び、それゆえに主の前での喜びが以前よりも大きかったようです。

そのことが分かる一つのことは、いけにえを献げたことです。13 節。もう一つのことは、ダビデの様子です。14 節。「主の前で力の限り跳ね回った」とより大きな喜びが表されていたことが分かります。

そして、主に仕える思いも表されていました。ダビデは王服ではなく、亜麻布のエポデを着ていました。祭司が幕屋で仕える時に着る簡素な服です。主に仕える者としての自覚を持っていたということでしょう。

また、人々の様子も、ウザが打たれたことを踏まえて、主の前に厳粛さをもっていたことが分かります。前回のような楽器を鳴らすことはなく、歓声と角笛で喜びを表していました。

このようにダビデと民の信仰が整えられて、聖なる喜びが与えられていました。

ところが、その信仰と喜びに水を差すような思いを持っていた人がいました。16 節。サウルの娘ミカルはダビデの妻ですが、夫ダビデの様子を見て、蔑んだというのです。王にふさわしくないと考えたのです。

こうして主の箱はエルサレムに運び込まれました。17 節。エルサレムは王の都から聖なる都となりました。主の箱によって象徴される主の臨在が、エルサレムに表されることになりました。もちろん主の箱を置きさえすれば良いものではありません。王と民の信仰がなくてはなりません。「ダビデは主の前に、全焼のささげ物と交わりのいけにえを献げ」ました。こうして主の箱が置かれた幕屋での礼拝が再開されることになりました。

この章には「主の前」ということばが繰り返されています。主の箱によって主の臨在が象徴的に表されます。そして、象徴される通りに、主への礼拝の場には確かに主が臨在されるのです。文字通り「主の前」なのです。

そして、主の前に礼拝を献げたことによる喜びは民の間で分かち合われます。18～19 節。主によって選ばれた主の民が、共に主を礼拝し、主の祝福をいただきます。そして、その祝福と喜びを互いに分かち合い、主の恵みと真実を証しするのです。

生ける神、主に礼拝を献げることが主の民に与えられている第一の務めであり、恵みです。私たちがこうして安息日ごとに、主の日ごとに、主の前に共に出て、礼拝を献げていることが私たち主の民、教会の第一の務めであり、恵みなのです。私たちがキリストの御名によって集まり、礼拝しているところに、主がご臨在くださっています。目に見えない主が臨在しておられることが象徴的に表され、実際に臨在しておられるのです。その主の前に出ていることの恐れを私たちは持っているのでしょうか。そして、喜びに溢れているのでしょうか。

こうして「民はみな、それぞれ自分の家に帰」りました。ダビデも自分の家族を祝福しようと戻ると、ミカルが迎えに出て来て言いました。20 節。彼女は、王は威厳がある服装をして、威厳がある態度で人々の前に出るべきだと思っていたのでしょう。

それに対してダビデは言います。21～22 節。ダビデは主が自分を選び、主の民の君主として立てたことを信じていましたし、その光栄を思いつつ、主の前にへりくだっていました。その主への恐れと喜びを表しているのだと言います。また、信仰を問われたダビデは、決して王服に身を包み、高い王座から神の箱を見下ろして迎えるのではなく、仕える者の姿で、主の前で喜び踊り、主の箱と共に進んで行きました。そのようなダビデの態度は、彼の生涯の歩みにも表されていくことでしょう。

ウザが主に打たれたことによって、ダビデは自分の信仰と動機を問われました。聖なる神の前にへりくだり、みことばに立ち返り、ふさわしいあり方と方法を教えられました。私たちも、主の前にへりくだり、みことばによって正され、ふさわしい歩みに導かれるように祈りましょう。

主に取り扱われたダビデは聖なる神、主の前に出る厳粛さと喜びを持って、定められた方法に従って主の箱を運びました。そして、主の臨在をリアルに覚えて、礼拝を献げ、主の恵みを分かち合いました。私たちも主の前に出ていることの恐れと主の恵みに対する感謝と喜びを持って主を礼拝しましょう。